

二〇二〇年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、もとの文章から一部省略した部分があります。

人とコミュニケーションをするとき、互いの振る舞いをよく「ふたりの関係が○○だから」という理由で説明したり、理解したりする。

「最近、親しくなってきた、よくメールのやりとりをしている」

「仕事上の関係だから、プライベートなことを話すのは控えている」

こういう感じで、相手との関係がどういう性質のものか、どんな状態にあるのかに応じて、ぼくらは行動のパターンを変化させている、と思っている。

でも、この理解の仕方は正しいだろうか？

①
こんなケースを考えてみよう。最近ときどきメールをするようになった女性を思い切って食事に誘う。最初は、遠慮がちに敬語まじりで話していたけど、くだけた感じで話しかけてみる。でも相手はずっと敬語のまま、あまり打ち解けた感じにならない。こつちがなれなれしく話すと、戸惑った表情を見せる。こういうとき、ふつうなら少し言葉づかいに気をつけながら話すだろう。

自分と女性との「関係」は、目に見えない。相手は自分のことをどう思っているのか。もっと親密になりたいのか、慎重になつていいのか。ぼくらは、それを手にとるように「知る」ことはできない。もちろん、その人自身だって、自分の気持ちをすべて正確に把握しているわけではない。

②
そこでは、自分／相手の話す言葉や話題、表情などを手がかりにしながら、ふたりの「関係」や互いの「気持ち」を推し量っていいくしかない。

(中略)

つまり、ぼくらは「関係が〇〇」だから、ある行動のパターンをとるのではなく、その場に投げかけられた行為の蓄積によって、なんらかの関係をリアルなものとして感じとっている。「よくメールのやりとりをしている」からこそ、「親しくなってきた」と思えるのだし、「仕事上の関係」でも「プライベートなことを話す」ようになれば、「距離が近くなった」と感じるはずだ。

相手との「関係」が先にあるのではなく、ふたりのあいだの「行為」が手がかりになって、やっとその状態を「わかる」ことができる。

ほかに、人にメールを出すとき、「くさま」と書くのか、「く様」と書くのか、「くさん」なのか、「くちゃん」なのか、「く先生」なのか、^{だれ}誰しも迷うことがあるだろう。

③そこで、自分が「くさん」と書いて、相手が「く様」と返してきたら、「く様」にしたほうがよかったかな、^かかと思ひ直すかもしれない。「くちゃん」となっていたら、次のメールからもっとくだけた表現を使いはじめられるかもしれない。

そんなの宛名の書き方にすぎないではないか、と言われるかもしれない。でも、ぼくらの「関係」をかたちづくっているのは、こんな些細なことの積み重ねでしかない。

男女が恋愛関係になったとき、最初に「呼び名」を変えることは、今後ふたりが親密になるための大切なきっかけになる。ふたりの仲が深まったから呼び名が変わるのではない。呼び名を変えることで、これから別の深い関係に切り替わることを確認しあっているのだ。

(中略)

自分が相手にどういう行為を投げかけるのか。相手が、どんな行為を投げ返してくるのか。こうして、ふたりの関係がある「かたち」をもっていく。

「親友」や「恋人」、^①「家族」といったカテゴリーは、その一時的な「かたち」にあとから説明を加えるためにもち出されているにすぎない。だから、「関係」はもろいし、移ろいやすい。でもだからこそ、「関係」は互いの行為によって変えることができる。

ほくらの手を変えられる社会のありさまに目を向ける。世の中を動かす「権力」や「構造」、「制度」といったものは、とても巨大で強力だけれども、^②まずはすべてをその「せい」にすることをやめてみる。

では、どうやって自分たちの手で「関係」の網の目としての社会をつくりあげていくのか。

エチオピアといえば、コーヒーを思い浮かべる人もいるだろう。エチオピアは、日本で「モカ」として知られるアラビカ種の原産地で、世界的にも有数の生産国である。

南米やアフリカのコーヒー生産国は、ふつう国内ではあまり消費せずに、もっぱら海外に輸出しているケースが多い。でもエチオピアでは、コーヒーの全収穫量の半分近くを国内で消費している。人びとは、コーヒーを貴重な現金獲得源としてだけでなく、日々の大切な嗜好品として楽しんでいる。

コーヒーを飲むとき、エチオピアの村では、きまつて隣近所の人を招く。自分たちの家だけで飲むことは、まずありえない。

そんなことをしたら、すぐ「あそこは自分たちだけでこっそりコーヒーを飲んでいるのよ！」なんて、陰口をたたかれてしまう。隠れて飲もうとしたって、どうせ豆を挽く音や炒るとき^③の香り^④でばれてしまう。コーヒーは誰もが好む嗜好品というだけでなく、独り占めせずみんなに振る舞うべきアイテムなのだ。

注 *カテゴリー……分類したとき、同じ性質のものが入る範囲。

*アイテム……品物。

自分とは異なる民族でも、異教徒でも、コーヒーを飲むときは、互いに誘い合って一緒に飲む。そして、二杯、三杯とおかわりしながら、二十〜三十分の時間をともに過ごす。

調査してきた村には、イスラームを信仰するムスリムとエチオピア正教のキリスト教徒が混住している。民族的にも、複数の民族がともに生活している。でも、コーヒーを飲む関係は、かならずしも同一の民族や宗教ごとに決まっているわけではない。むしろ家の近さのほうが必要になる。近所の人を招くホスト側の家族がムスリムであれば、コーヒーを飲むとき、まずアッラーに祈りを捧げる。その場に招かれたキリスト教徒も、祈りに合わせて「アーメン、アーメン」と呼応する。

民族が違う場合、会話のなかでふたつの言語がまじりながら会話が進むこともある。エチオピアをはじめアフリカの多くの地域では、複数の言語を話せるのはめずらしいことではない。だから、話題に応じて話される言語が途中から切り替わったりする。

(中略)

けんかなどをすると、コーヒーに呼ばなくなったり、呼ばれなくなったりする。そして、またびよんなことから再開したり、メンバーが入れ替わったりする。隣近所が誰とコーヒーを飲んでいるか、集落の人はだいたい知っている。コーヒーをともに飲むことが、「親密な関係」を公的な事実とし、その「つながり」を可視化するのだ。

最初に、人と人との「関係」という現実が互いの行為によって構築されていく、と書いた。ぼくらは、最初から定まった関係に沿って行為しているのではない。小さな行為を積み重ねながら、ある「関係」をつくりだしている。

エチオピアの村で暮らす人びとの関係も、そういう視点から理解できる。人びとは、「民族」や「宗教」、「言語」といった固定した枠組みだけをもちに「関係としての社会」を築いているわけではない。

ともにコーヒーを飲み、たわいもない噂話に興じたり、体験談をおもしろおかしく話したりしながら、ひとつの「つながり」を実

現させている。多様な背景をもった人びとが同じ時間を過ごすという積み重ねが、共通の理解や認識を生み出し、言葉や宗教の壁を越えた、ともに生きる素地をつくりだしている。民族や宗教が違っていても、深い友情で結ばれることもあるし、結婚してひとつの家庭を築くことだってある。

たぶん人類は、長い歴史のなかで、そうやっていろんな「他者（かれら）」を「わたしたち」の一部にしながら生きてきたはずだ。外国人だから、文化が違うから、異教徒だから、○○だから……。とかく、ぼくらは異質な他者を既存のカテゴリーに押し込め、最初から関係を築くことを拒絶してしまいがちだ。その排除のまなざしは、精神を病んだ人や障がいをもつ人などにも向けられる。でも、この排除が、じつは「わたし」や「わたしたち」の豊かな可能性を狭めていることに、多くの人は気づかない。さて、このあたりで、身近なところから「関係としての社会」を動かしていく可能性について考えてみよう。

(中略)

⑦ ぼくたちは、どうやって社会を構築しているのか？
⑧ いったいどうしたら、その社会を構築しなおせるのか？

「社会」というと、自分たちには手の届かない大きな存在に思えるかもしれない。でも、それはたぶん違う。

誰もが、さまざまな人やモノとともに「社会」をつくる作業にたずさわっている。そこでの自分や他人のあり方は、最初から「私たち」や「意味」が決まっているわけではない。他人の内面にあるように思える「こころ」も、自分のなかにわきあがるようにみえる「感情」も、ぼくらがモノや言葉、行為のやりとりを積み重ねるなかで、ひとつの現実としてつくりだしている。この、人や言葉やモノが行き来する場、それが「社会」なのだ。

注 *既存……以前からあること。

愛情も、怒りも、悲しみも、自分だけのもののように思える「ところ」も、他者との有形・無形のやりとりのなかで生み出される。そして、そのやりとりの方法が、社会を心地よい場所にするかどうかを決めている。

だから、ひとつめの問いへの答えはこうだ。

ぼくらは、人にいろんなモノを与え、与えられながら、ある関係の「かたち」をつくりだす。そして同時に、その関係／つながりをおして、ある精神や感情をもった存在になることができる。つまり関係の束としての「社会」は、モノや行為を介した人と人との関わり合いのなかで構築される。そこで取り結ばれた関係の輪が、今度は「人」をつくりだす。

ぼくらが何者であるかは他者との関係のなかで決まる。身近な他者が何者なのかも、あなたがなにをどのように相手に投げかけるかによって変わる。あなたの行為によって相手は何者かになり、相手からの呼びかけや眼差しによって、あなたは何者かであることを強いられたり、何者かになれたりする。

ぼくらは、強固なかたちで最初から「何者か」であるわけではない。ぼくらが他の人にいかに与え、受けとるのか。それによって生じる関係のなかから「わたし」や「わたしたち」が生まれ、「かれ」や「かれら」が生まれている。

だから、ふたつめの問いへの答えはこうなる。

社会の現実、ぼくらが日々、いろんな人と関わり合うなかでつくりだしている。あなたが、いまだのように目の前の人と向き合っている、なにを投げかけ、受けとめるのか。そこに「わたし」をつくりだし、「あなた」という存在をつくりだす社会という「運動」の鍵がある。

相手に投げかけられる言葉、与えられるモノ、投げ返される行為。そこで見えてくる「わたし—あなた」という関係、「わたしたち／かれら」という存在のかたち。そのどれをとっても、一時も動きを止めているものはない。

ほくらが動かし、動かされ、そのつどある「かたち」を浮かび上がらせている「関係としての社会」。とどまることなく、^①否応なしに、誰もがこの運動の連鎖のただなかにいるからこそ、ほくらは、その社会を同じように動かし、ずらし、変えていく可能性に開かれている。

与える。受けとめる。いま「わたし」と「あなた」をつなぎ、^②つくりだしている動きを見定める。もしそれを変えたいのであれば、それまでとは違うやり方で与え、受けとり、その関係の磁場を揺さぶり、ずらし続けなければならない。

これまでの話からしたら、ずいぶんと抽象的な言い方しかできないけれど、とりあえずはこの場所を中間地点としておきたい。

(松村圭一郎『うしろめたさの人類学』)

問一 ～～～～線ア「ひよんな」・～～～～～線イ「否応なしに」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア「ひよんな」

1 さまざまな

2 かんたんな

3 意外な

4 まれな

イ「否応なしに」

1 反省なしに

2 返答をせずに

3 考えなしに

4 無理やりに

問二 ——線①「この理解の仕方」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 相手との関係の距離が遠いか近いかは、親密さの度合いと必ずしも比例はしないということ。

2 自分が考える相手との関係を前提にして、それぞれが場面にに応じて行動しているということ。

3 相手にふさわしい行動を選択しながら、人間関係というものは築かれていくということ。

4 築きつつある相手との関係が、場面ごとの行動をパターン化することで明確になるということ。

問三 ——線②「それ」とはどのようなことですか。 ——線②より後の文中から十五字以上二十字以内でぬき出しなさい。

問四 ——線③「自分が「～さん」と書いて、相手が「～様」と返してきたら、「～様」にしたほうがよかったかな、と思い直すか

もしれない。「～ちゃん」となっていたら、次のメールからもっとくだけた表現を使い始めるかもしれない」とありますが、このように宛名を変えるのはなぜですか。三十字以上三十五字以内で書きなさい。

問五 —— 線④「まずはすべてをその「せい」にすることをやめてみる」というのはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 権力や制度などは巨大で強力なものであるが、社会は人が関わり合うなかで変化する部分も確かにあるから。
- 2 人と人との関係を網の目としてとらえると、様々な既存の枠組みは人の行為の前では無意味になってしまいうから。
- 3 固定的な枠組みにしばられて、最初から異質なものととの関係を築くことを諦めてしまおうと多様性が育たないから。
- 4 社会や時代は動き続けているのに、自分を受け身と思いいこむのは社会を作っている当事者の責任感に欠けるから。

問六 —— 線⑤「その「つながり」を可視化する」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 コーヒーを飲んでいる人同士が親しい関係であることが、誰の目にも明白になるということ。
- 2 コーヒーをいかに多くの人と飲んでいるかで、交友関係の広いことが自然にわかるということ。
- 3 隣近所を招いてコーヒーを飲んでいるうちに、民族や宗教の違いが解消されていくということ。
- 4 それぞれの家がコーヒーを公然と飲むことによって、集落内の結束も強くなるということ。

問七 —— 線⑥ 「わたし」や「わたしたち」の豊かな可能性」はどのようなことによって広がると筆者は考えていますか。それを述べた次の文の **I**・**II** にあてはまる言葉を、—— 線⑥より前の文中から **I** は五字、**II** は六字でそれぞれぬき出しなさい。

I である外国人や障がいをもつ人などと **II** こと。

問八 —— 線⑦ 「ぼくたちは、どうやって社会を構築しているのか？」とありますが、この問いの答えを三十字以上三十五字以内で書きなさい。

問九 —— 線⑧ 「いったいどうしたら、その社会を構築しなおせるのか？」という問いに筆者はどのように答えていますか。もっとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 社会は、言葉やモノが行き来する中であらわれる感情が現実のものとなっていく場であるから、憎^{にく}しみや否定的な感情を生む現実を変える必要がある。
- 2 人との関わり合いが、今度は向き合う人の存在を作り出すのが現実の社会であって、やりとりの方法を変えることで人との関係や社会も変えていける。
- 3 相手から自分が何を受け取るかで自分のあり方が決定するので、見えてくるものを今までと違った視点で受けとめていけば、社会の見え方も変わっていく。
- 4 人が動かし動かされ、その時々のかたちを浮かび上がらせていく社会は変わりやすいものだから、時間をかけて求める方向をめぐっていく。

問十 ——線⑨「その関係の磁場を揺さぶり、ずらし続ければいい」とありますが、あなたが友達や家族などまわりの人にこのようなことを試み、関係が変わったと思えた経験があれば、それについて九十字以上百字以内で書きなさい。同様のことについてあなたが見聞きしたり、想像したりしたことで書いても構いません。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

うん。なかなか。でも、もうちょっと。

キリシマもたくさんつんだ。薄い黄色のヒカゲツツジも並べてしまった。

道しるべは、まるで美しい花のくさりのように、その世で一番かわいいへビのように、舗装道路の上に横たわった。私はながめて満足した。

午後の日がいぶ傾かたむいている。建物のかげがどっしり道に広がって、花の色をなんだか寒い感じにしている。A―36のベージュの壁は西日を受けて、やけに赤っぽく見えた。私は放り出したランドセルを背負った。急に家が恋こいしくなった。

何かに熱中していて、思いがけず時間がたってしまったことに気づくと、いつもちょっとだけこわくなる。A棟の建物や人のいない道がひどくよそよそしく見え、帰ろう、さあ帰ろう、と胸の中で号令をかける。

だが、なかなか動けなかった。この道しるべ、そのすばらしい花の道しるべを残していくのがつらいのだ。

② 「ごめんね。帰らなきゃ。明日、明日、また来るから」

道しるべに話しかけたが、明日まで、花の列はそこにあるだろうか。じっとしていてくれるだろうか。

私はいいことを思いついた。

「家まで、つれていったげるよ！」

C―3の505号室まで、道しるべをつなげればいいのだ。誰かが、これを見てやってくるなら、当然、伊山佳奈の家まで来なければならぬ。誰か？ 誰？ 誰だろう。すてきなお客さんがいい。五月のすてきなお客さんにきまつてる！

私はスカートのすそを持って、つつじの花を手当りしだいに つんでいった。もう色は何でもかまわなかった。たくさん、たくさん数があるのだ。別れ道や曲がり角に、ちゃんと置いていけるだけのつつじが必要だった。

最初に音がした。私はあんまり夢中になっていたもので、そのすさまじいガラガラが自分のそばに近づくまで、気づきもしなかった。ガラガラガラガラ。道路を車輪がこする音。普通の自転車なら、あんなにうるさい音はたてない。ガラガラガラ。まだ自転車に乗れないチビがつけている補助輪のひびきだった。

私はふりむいて、弟の進が、真新しい補助つき自転車で、つつじの道しるべをひいていくのをじっと見ていた。なぜか、声をたてることができなかった。

大小四つの車輪が、濃いピンクや薄いピンクや朱色の花を次々とふみつぶしていく。私は自分の胸がつぶれるような思いがした。道しるべがこわれる！

進は私に気がついた。

「あつお姉ちゃん……じゃなくて、カーナ」

彼は感心にも私をカーナと呼んだ。大きな黒目がうれしそうに光っている。進もまた、親の言いつけを破り、一人でこんなに遠くまで来ていたのだ。だいぶ心細かったところ、思いがけず私を見つけて喜んだのかもしれない。

だが、私は返事をしなかった。進は私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんつつじの花をまじまじと見た。

「ああ、あーあ……」

いっけないんだつと言おうとしたのだろうが、その前に私はおんおん泣きだしていた。

「こわしたあ、こわしたあ、進のバカあ」

弟は自転車にまたがったまま、ひどくおびえた顔をした。でも、私は彼を指さして、泣きながらどなった。

「あんたが悪いのよ。直してよ。もどおりにしてよ」

進は自転車がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるがわる見比べた。そして、自転車をおりると、道に散らばったつつじの花を一つ二つひろい上げて、また私を見た。

「直してよ！」

私はさげぶ。一度かんしゃく玉がはれつすると、とことん泣きさげぶのが私のくせだった。

大切な花の道しるべ。あんなきれいなものの上をどうして自転車で走ることができるのだろう。なんでこんなバカな弟がそばにいるのだろう。急に冷たく強くなった夕方の風が、車輪にひかれた花の列をいよいよバラバラにこわしていった。

私は泣きながら自転車を足でつけた。進の補助つき自転車。あのいまましい新品の自転車。がしんと耳ざわりな音がして、自転車はよろめいたが、三十センチほど地面をすべっただけで、たおれなかった。

① 進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた。やがて、彼は道に散らばったつじの花をひろい集めて、自転車のかごに入れた。つぶれた花も、無事だったものもおかまいなしにどんどんひろっている。自転車をそのままにして自分がちよこまか動きまわるため、全部の花をひろってしまうまでにはずいぶんと長い時間がかかった。

かごにぎっしりつめこまれた明るい色の花たちは、夕ぐれの光の中でくろくろとして見える。③ 私は、そのもっそりとした不気味なかたまりから目をそらした。それは、つじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉ふきつでいやなものだった。

母は、私がヒステリーをおこしたのを一目で見やぶった。わけを説明しなければならず話していくうちに、私はちよつと分が悪い⑤ など思った。

「わざとお姉ちゃんを作ったものをこわしたんじゃないわね。意地悪したんじゃないでしょ？」
母は進に聞いた。進は大きくこっくりとうなずいた。

「お姉ちゃんにあやまったの？」

かぶりをふる。まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

「ごめんなさい、は？」

母にうながされても、進はむっと押し黙だまっていた。自分が悪くないと思っっている時の進はひどくがんで、誰の言うこともきかない。

「きれいに咲さいているお花を、そんな風にむしっちゃいけないのよ。わかってるわね」

母はそれ以上進にかまわず、今度は私に向かって言った。

「うん」

私はしぶしぶ答える。母が進の味方についているのがわかるので、おもしろくない。

「たくさん取ったの？」

「うん」

「どのくらいたくさん？」

その質問に答えるのはむずかしかった。気が進まなくもあった。

「百個かな？」

私は首をひねった。

「進の自転車のかごにうんといっぱい」

「そんなに取ったの？」

母は声をはりあげた。

「だめよ！ そんなに取っちゃダメ！ お花を取ったりしたらいけないの。さあ、もうしないうって約束してちょうだい」
けっきょく、私おこが怒られたのだった。これはおもしろくないので、母がいなくなると、私は進をめいっぱいこづいた。

「明日の朝までに、お花、もどおりにするのよ！ いい？」

「どうやるんだよ」

「自分で考えるの！」

すると、進は見たことがないほどこわい目をして、私をにらんだ。大きな黒目がちぢんで白目ばかりになったように見えた。

その晩は、私が先にお風呂にはいった。進とは同じ部屋を使っているが、彼はまだ、つつじの花を一階の自転車置場に放りっぱなしにしているようだった。蛍光灯がぼやぼや光る夜の自転車置場は、ずいぶんと気味の悪い場所だ。あの薄暗がりの中のつつじの花のかたまりを思い浮かべると、なんだかい気がしない。進はどうするつもりだろう、と私は考えた。それとも、どうもしないつもりかしら。

私はお風呂が好きで、とても長い時間はいつている。スポンジのアヒルを湯船にしずめたり、紙せっけんをとかしてみたり、シャンプーのあわで鏡に絵をかいたり、やることはいくらでもあるのだ。進とつつじの花のことはいつのまにか忘れていると、いきなり浴室のドアが開いた。

進だ。その時、私は薄い水色の湯船につかり、あがる前の「百数え」をやっていた。

「七十七、七十八……なあに？」

いきなり、ふぶきのように、紅色のひらひらがふりかかってきた。一気にばあつと、私の頭をめぐがけて、濃いピンク、淡いピンク、朱色、薄紫、白のこまかいかけらが落ちてくる。鮮やかな色に飲みこまれて、私は一瞬息ができなくなる。つつじだ。つつじのふぶき。

進は、砂場用のバケツを空にしてしまうといかにも気分よさそうに、にやりとした。私はあつけにとられて弟を見つめた。頭から花びらをすくって手の平でながめると、つつじはだいぶおおざっぱに引きさかれていて。それにしても、やわらかい花びらをこれだけちぎるのは、ずいぶん根気のいる仕事だろう。

ドアのしまる音がして、進は姿を消した。私は、湯船に浮かんだこまかい花びらを、お湯と一緒にじゃぶじゃぶすくった。それは

とてもきれいだっただが、こわくもあった。花が完全に死んでしまったのがわかるので、こわかったのだ、紅や朱や濃い桃色ももいろのかけらは、花の血のようだ。進が花を殺してしまったと思い、私は湯船の中でみぶるいした。

A棟のわき道に咲きこぼれていたつつじ。その枝先の生きている花が頭に浮かんだ時、私は悪いのは自分であることに気がついた。

A がむしりとって、 B がすてて、 C がつぶして、 D が引きさいた。でも、最初は E だ。

自転車道するべをひいてしまった時のショックが、あまりに大きかったため、進ひとりが花をめちやくちやにしたような気持ちになっていた。だから、母が進より私を怒るのがゆるせなかったのだ。

生きている花をつんだのは私なのに、それが美しい道しるべであるうちは、つつじが死んでいることがわからなかった。花が、自転車のかごの中の黒いかたまりになった時、かすかな悪い予感がめばえた。そして、進が花を小さなかけらに変える。血ちのような花ふぶきにとりまかれた今、私はすっかりおびえてすくんでしまったのだ。

自分がとても残酷ざんたくな気がした。明るい色の小さな花のかけらが、髪かみやはだやお湯の上や白いタイルの洗い場の床ゆかに散っているのを、きれいだなと思ひ、こわいなと思ひ、胸がどくどくと鳴って苦しかった。

⑧ 私は本当に長いこと、お湯の中で、身を堅かたくしてじっとしていた。湯気が頭につまって、なんだか首がくらくらするようだった。「ちょっと、いつまではいってるの！」

母が私をひきずりだしにやってきた時、その力強い声に、はっとして目をみはった。しかし、母は私よりもっとはっとしたらしく、小さな悲鳴をあげたのだった。

「何？ 何よ、これ！」

色とりどりのつつじ風呂。

私はまだぼんやりとしていて、返事が頭の中に用意できなかった。母は、湯船に浮かんだつつじのかけらを手ですくいあげた。

「まあ……」

なんとも言いようがない声で、母はうめいた。

「つつじよ」

私はやっと声を出すことができた。そして、身の安全のためにつけくわえた。

「 F 」

母はお湯の中をかきまわしていたが、透明とうめいなおかしな形のかけらを、いくつか手の平にすくいあげた。それは、もちろん花びらではなかった。私はしばらく考えてみた。そして、ようやくその正体がわかった。丸めたセロテープとセメダインのかけらだ。

急にほのぼのとおかしくなった。進の気持ちだが、そっくり理解できた。弟は私に言われたとおり、傷ついた花をもとにもどそうとがんばったのだ。彼はセロテープとセメダインを使って、破れた花びらをつなぎあわせようとした。きっと、さんざん苦労したのだろう。どうにもならなくて、頭にきて、ついに、花をばらばらにしてしまったのにちがいないのだ。

私はなんだか、ほっとしたように明るい気持ちになって、湯船から、ざんぶりとあがった。

（佐藤多佳子『五月の道しるべ』）

問一——線①「建物のかげがどっしり道に広がって、花の色をなんだか寒い感じにしている」とありますが、それはなぜですか。

もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 夕方になるにつれて日かげが増えていったので、あらためてながめると夢中になって並べていた花の美しさが半減していたから。

2 西日を受けたアパートに日差しがさえぎられてしまい、花を並べながら知らないうちに元いた所と違う場所まで行き着いていたから。

3 日が暮れたのもわからないほど花を並べるのに集中していたために、かなり気温が下がったことにこのときはじめて気がついたから。

4 花を並べるのに熱中しすぎて思いのほか時間がたっていたことに気づいたときには、日は傾きあたりの風景はよそよそしく変わったから。

問二——線②「ごめんね。帰らなきゃ。明日、明日、また来るから」と言ったときの「私」の気持ちとしてもつとも適当なものを

次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 懸命けんめいに並べたつつじを残していくのはまるで人間の友達と別れるようにつらく、明日まで無事かも心配で、花に言い聞かせている。

2 このままつつじを置き去りにすると風で吹き散ちらされてしまうだろうと気がかりになって、手立てを思いめぐらしながらくり返している。

3 せっかく並べたつつじを誰にも見せないまま失ってしまうのは残念でならなくて、あきらめきれない自分の心を何とかなだめている。

4 美しいつつじと別れるのはなごりおしいが、さすがに帰らなければならない時間になってしまったので、明日の楽しみに思いをはせている。

問三 ～～～線㉞「大きな黒目がうれしそうに光っている」・～～～線㉟「進は、私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんのつつじの花をまじまじと見た」・～～～線㊱「進は自転車がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるがわる見比べた」・～～～線㊲「進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた」について、これらから読み取れる進の気持ちと様子の説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ひとりで心細くなっていたところ姉を見つけて喜んだが、花を摘んでいる姿にまずいと感じた。しかし、姉が泣きわめく様子を見て大事な創作を自分が壊してしまったとくやみ、自転車をけられても怒りもせず花を拾い始めた。

2 ひとりで心細かったところに姉と出会って嬉しくなったが、花を摘むのはいけないことだと思った。ところが姉は自分の行動を激しくなじるのでおびえて花を拾ったが、姉の怒りは増す一方で言われるままにすべて拾い集めた。

3 遠出して不安になっていたから姉に会えたのは嬉しかったが、ちぎった花を見て悪いことだと言おうとしたばかりに姉は腹を立ててしまっておさまる気配がない。大事な自転車をけるのをやめさせようとせつせと花を拾い続けた。

4 ひとり自転車で乗っていて姉を見つけ驚いたが、花を取っていると知って困ったことだと思った。最初、姉が何を望んでいるかもわからなかったが、わけを知ってかわいそうになり既に摘んだ花だからもう一度集めてもよいと思った。

問四 ——線㉓「私は、そのもっそりとした不気味なかたまりから目をそらした」とありますが、それはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 美しい花を引きさいて殺してしまった進へのくやしさが、改めてこみあげてきたから。

2 美しい花を集めたつもりだったのに、かごの花は見知らぬいやなものに思われたから。

3 夕ぐれのあわい光は、美しかった花をくろくろとした汚いものに変えてしまったから。

4 姉弟げんかのあげく進に拾わせた花は、美しいというより不ゆかいな物体だったから。

問五 —— 線④ 「ヒステリーをおこした」とありますが、これと同じような「私」の様子を表している言葉を —— 線④より前の文中から十二字でぬき出しなさい。

問六 —— 線⑤ 「分が悪いなと思った」とありますが、「私」はどのようなことについて「分が悪い」と思ったのですか。次の

I . II にあてはまる言葉をそれぞれ書きなさい。

I 弟に比べて、「私」は II ということ。

問七 問 1 A 私 2 A 私 3 A 私 4 A 私

2 B 私 3 B 進 4 B 私

1 A 私 2 A 私 3 A 私 4 A 私

1 B 私 2 B 進 3 B 私 4 B 私

1 C 私 2 C 進 3 C 私 4 C 私

1 D 進 2 D 私 3 D 進 4 D 私

1 E 私 2 E 私 3 E 私 4 E 私

問八 —— 線⑥ 「それが美しい道しるべであるうち」とはいつのことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 道路に「私」が並べた美しい花が生気を失うまで
- 2 枝先の生きている花が「私」にむしりとられる前
- 3 つつじの花を進の自転車めちやくちやにする前
- 4 アパートのわき道に花が咲きこぼれている間

問九 —— 線⑦ 「血のような花ふぶき」とありますが、具体的に何をたとえてこのように言うのですか。二十字以上二十五字以内で書きなさい。

問十 —— 線⑧ 「私は本当に長いこと、お湯の中で、身を堅くかたしてじっとしていた」とありますが、このときの「私」の気持ちを四十文字以上五十文字以内で説明しなさい。

問十一 F に入るもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 怒らないでね
- 2 私は悪くないわ
- 3 進がやったのよ
- 4 どうなっているの

三

次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 私は手芸クラブにゾクしている。
- 2 いよいよ横浜港から太平洋に向けてタンカーがシユウコウする。
- 3 祖父のブユウデンを聞く。
- 4 決勝戦でヤブれる。
- 5 外来種はもともといた生物にガイを及ぼす^{およ}ことがある。
- 6 新しい事業に参画^{さんわ}する。

問題は以上です

